3・11 残し、語り、伝える

岩手県山田町 東日本大震災の記録

岩手県山田町

津波の犠牲出さない町に

東日本大震災の大津波は、私たちの愛する人たちや大切な物を全て奪っていきました。

あのころ、間もなく門出を祝う卒業式だというのに、いやに地震が多いと思っていました。微かではありましたが、頻繁でした。そのうち収まるだろうと考えていました。3月9日、震度4の地震が発生しましたが、いつものように何もありませんでした。しかし、2日後の午後2時46分に大きな揺れ、そして大津波が当町を襲いました。見る見るうちにがれきがその後に残りました。間もなく火災が発生し、町は跡形もなくなりました。

このような現実がよもや目の前に現出するとは誰が想像したでしょうか。現実を決して認めたくない自分がいました。しかし、現実の問題として受け止めなくてはいけないとも思いました。私が小学1年生の時のチリ地震津波以来、津波に遭うのは三陸沿岸に住む者の宿命だと肝に銘じてきましたが、堤防をはじめ文明の力が自然の力を制御してくれるだろうと漠然と考えていました。そのような考えを津波は一蹴し、去って行きました。われわれが自然の中に生かされていることをまざまざと思い知らされた時でした。

幾度となく繰り返される津波災害に対し、国を挙げて取り組んでいただくことになりました。復興庁が創設され、多くの税金が当町にも手当てされて、新しい町づくりが始まりました。山田町は10年に及ぶ復興計画を作成し、完遂に向けて進んでいます。計画の大きな命題は「二度と津波による犠牲者を出さない」。沿岸に住む者が向き合わねばならない永遠のテーマに、国を挙げて取り組んでいるのです。多くの難関はありますが、次世代のためにもしっかりと進めなくてはなりません。

ここに、震災記録誌『3・11　残し、語り、伝える　岩手県山田町東日本大震災の記録』が発刊される運びとなりました。当地では津波のたびに記憶が風化し、惨禍を繰り返してきました。だからこそ事実に即した克明な記録が必要とされます。この書籍は次世代の方々にとって大変貴重な資料となるはずです。

震災からまる6年が経ちました。ここに至るまで、多くの困難を乗り越えてこられたことは、国内外の多くの皆様方のご支援と国・県のお力添えのたまものであり、あらためて御礼申し上げます。

山田町長　佐藤信逸

●表紙題字（各章の扉も）　佐藤信逸山田町長

●表紙写真　町の中心部は大津波と大火災から２週間後、傷痕を包むように真っ白な雪に覆われた（平成23年３月27日午前６時１分撮影）。人々は悲しみと不安の真っただ中にいながらも、山田湾に力強く上る朝日にささやかな希望を託した

3・11 残し、語り、伝える
岩手県山田町 東日本大震災の記録

目次 CONTENTS

津波から命を守るために …… 2
山田町とは …… 4
［写真特集］あの日、ありし日、そして今 …… 7

第1章　残す …… 33
震災の概要と被害状況　34
町役場の「3・11」　60
町はどう対応したか　64

第2章　語る …… 77
私たちのまちが消えた　78
避難所で起きたこと　114
三つの津波をくぐって　118

第3章　伝える …… 133
津波の来襲と避難　134
石に刻まれた教え　226
火災はなぜ拡大したのか　232
「NPO問題」第三者調査委の報告概要　240

第4章　支える …… 245
炊き出しに熱い思いを　246
応援職員の働き　250

第5章　興す …… 255
祭りと心の復興　256
山田町と「新しい町」　262
ふるさとを恋うる歌　268

山田町が生まれ変わりつつある。被災町民のために造成された高台の織笠第1団地は山田湾を一望し、新しい町づくりが進む（平成29年4月10日撮影）

津波から命を守るために
千年越えて語り継ぐ

東日本大震災の大津波が山田地区の防潮堤を越流した瞬間（平成23年3月11日午後3時20分ごろ撮影）。津波は私たちの平穏な暮らしを奪い去った

大沢地区の津波慰霊碑の除幕式で「命を守る五の誓い」を唱和する大沢小の児童ら（岩手日報社提供）。碑の裏面には物故者の氏名が刻まれている

私たちの町が東日本大震災の「平成の大津波」にのみ込まれ、がれきに埋もれ、紅蓮の炎に包まれてから、すでに6年の月日が流れた。

あの津波は瞬く間に愛する人たちを、長年暮らした家を、明るくざわめいていた町を、通い慣れた小径を、美しかった渚を、そして、私たちが属するありとあらゆる大切なものを奪い去った。

この小さな町で、800人を超える人々が逝いた。本書はあの震災の真実を語り継ぎ、後世に教訓を伝え、今に生きる人が津波から命を守るために編まれた。

あの日、津波は、かつて襲った明治三陸大津波（1896年）と昭和三陸大津波（1933年）の教訓が彼方に遠のき、先のチリ地震津波（1960年）から51年の時を経て、その記憶が風化した町を直撃した。気象庁による当初の予想津波高が「3メートル」だったり、その前年の平成22（2010）年2月に大津波警報が出たがほとんど被害がなかったりしたことも油断を生んだ。

ある人は漁船が心配になって浜に下り、ある人は「過去にここまで津波が来たことはないから」と家にとどまり、またある人は家族や隣人を救おうとして、命を落とした。町は集落の背後に高台の迫る地形が多く、津波が到達するまでの三十数分の間に、適切に避難さえしていれば多くの命が助かったであろうことは誠に悔やまれる。

震災から5年3カ月後の平成28（2016）年6月11日、山田町大沢の曹洞宗南陽寺の門前で、地区の津波犠牲者120人を悼む慰霊碑が除幕された。そこに刻まれた「命を守る五の誓い」があの津波の教訓と戒めを極めて簡潔に、そして力強く発している。

一、この大津波のことを、子どもや孫の代まで、千年こえて語りつなげ。
二、大きな地震のあとは、必ず津波がやってくる。
三、潮が大きく引いたら、必ず津波がやってくる。
四、家族で話し合い、ひなん場所を決めておけ。
五、少しでも高いところに逃げろ、逃げたら、ぜったいにもどるな。

ここに、本書の伝えたいことがほぼ語り尽くされている。

碑文は大沢地区で生まれ育ち、町立大沢小学校の校長も務めた箱石敏巳さん(75)が、各地に残る過去の大津波の記念碑などを参考に紡ぎ出した。町立船越小学校の教員だった昭和43（1968）年に三陸沖北部地震（十勝沖地震）の津波を目撃したことや、東日本大震災の津波でいったん避難した親族3人が自宅などに戻って亡くなったことが念頭にあった。「町の大半が津波で流された事実を分かりやすい言葉で、きちんと子や孫に伝えねばならない」と痛感したという。

慰霊碑建立の中心になった同地区遺族会の福士勝久会長(72)は、実兄の勝之さん＝当時(68)＝を震災関連死で亡くした。「人の好い兄だった。亡くなった方々に成仏してほしい。町の皆さんには、一年に一度でも碑の前を通りかかった時に手を合わせてしのんでもらえれば」と語る。

本書の編さんに当たっては、今後、何人たりとも津波による犠牲を出さないために、客観的なデータの集約だけにとどまらず、「教訓」を前面に押し出した。真に「血の通った」震災記録誌をめざし、ジャーナリスティックな視点による事実の掘り起こしと学術的な知見に基づく検証作業とが互いに補完できるような方法を模索した。

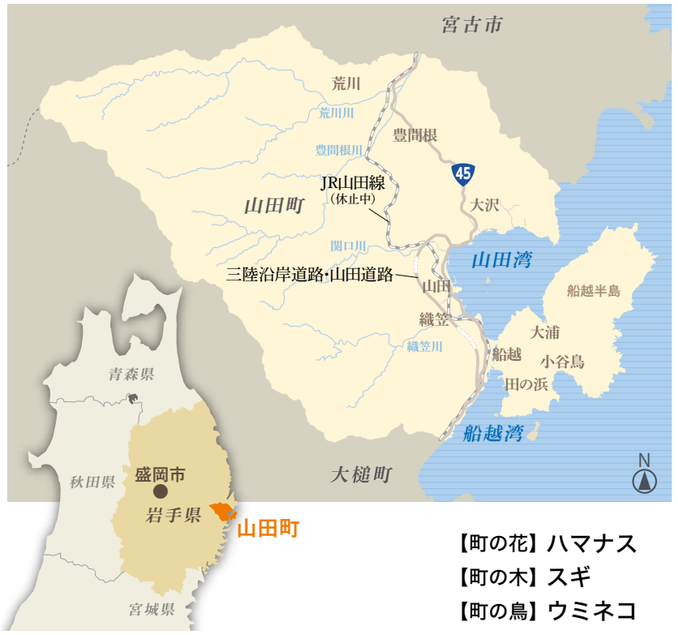
第一に、震災で命を落としたり、人生を大きく変えられたりした人たちの背景にその数の分だけ現実の足跡や営みがあることを深く思った。できる限り市井に飛び込み、一記者、一町民の目と耳で生の証言を拾い集めた。時間の経過による現象や数値の推移だけでなく、何があって、何のために、なぜそうなったのかを記録、検証しようと試みた。

その次に、被災の実相を探るのには地理学的なアプローチが有効だと考え、採用した。太古からの土地の成り立ちや来歴によって、地震や津波の及ぼす影響が大きく異なってくることを明らかにするため、学界の泰斗でつくる研究チームが被災地域をくまなく踏査した。各地区で特徴的な地形・地質や土地改変の経緯、そこで取られた津波からの避難行動の分析は将来、町の防災に必ずや役立てられよう。

そして、あの津波の規模と甚大な被害は、決して、かつてなかった「未曽有」でなく、そう遠くない未来に再び繰り返される恐れがあると念を押しておきたい。震災から6年のこのときは、仏教でいう七回忌の節目に当たる。本書がたとえささやかでも、浄土に旅立たれた方々一人一人の供養になれば幸いである。

平成29（2017）年5月

山田町とは



■山田町

【面積】
262.81平方キロメートル

【人口】
16,057人
（平成29年4月1日現在）

【震災前の人口】
19,270人
（平成23年3月1日）

【町の花】ハマナス
【町の木】スギ
【町の鳥】ウミネコ

【町章】
町民の平和、協力、発展をそれぞれ湾、波、船として表す
（昭和45年11月2日制定）

リアス海岸と広大な山林

山田町は県庁所在地の盛岡市から東南東に約70キロ離れ、県沿岸部のほぼ中央に位置する。面積は約263平方キロメートル。平地部は極めて少なく、大半を山林原野が占める。北は宮古市、南は大槌町、西は宮古市と大槌町に境を接し、東側は太平洋に面する。沿岸はリアス海岸の特徴を有し、ブナやスギなどの森林に覆われた船越半島を挟んで、北側に山田湾、南側に船越湾が広がる。

年間の平均気温は10・3度、降水量は約1510ミリ（いずれも過去30年の平年値）。沖合で寒流の親潮と暖流の黒潮などが混じり合い、西方に広がる北上山地の影響を受けるなどするため、県内陸部より降雪量が少なく、冬は比較的暖かく、夏は涼しい。夏期は海側から湿潤で冷たい北東風「やませ」が吹き込むことがたびたびあり、山田湾にはやませの霧が幻想的に漂う。

町は北から順に豊間根、大沢、山田、織笠、船越の行政区に大きく分かれる。内陸の豊間根を除いて海に広く接し、東日本大震災では甚大な津波被害を受けた。

養殖に適す山田湾

周囲約20キロの山田湾は湾口が狭くつぼんだきんちゃく型で、「海の十和田湖」と形容されるほど穏やかに凪ぐことが多い。湾内には関口川や織笠川などの河川から山間部で蓄えられたミネラル分が注ぎ込み、カキやホタテガイなどの格好の養殖場になっている。多くの養殖いかだが浮かぶ景観は豊かな三陸海を象徴する風光といっていい。波の静かな条件を生かして、近年はシーカヤックやボートなどマリンスポーツの舞台としても脚光を浴びている。

山田湾に浮かぶ無人島の大島は別名「オランダ島」と呼ばれ、江戸初期の寛永20（1643）年、オランダ船ブレスケンス号が水や食料を補給するために入港したことにちなむ。

船越湾は広く外洋に面し、船越半島の東南側では激しい波に侵食されて切り立った、赤平金剛や大釜崎などの海食崖が見る者を圧倒する。町の極東で船越半島の突端「亀ヶ崎」は東経142度3分54秒にあり、本州最東端の重茂半島鮭ヶ崎（宮古市）との差は27秒で約650メートルしか違わない。船越半島の付け根のJR山田線岩手船越駅（休止中）は本州最東端の駅として知られる。船越半島は三陸復興国立公園の中央に位置する。

海と森に囲まれた豊かな自然環境は、地理的な成り立ちや歴史・文化を教育や観光に生かす「日本ジオパーク」の一つ「三陸ジオパーク」を構成。穏やかで美しい「山田湾の景観」と、2億年以上前の海の堆積物が観察できる「豊間根川上流の地層」がその中に含まれる。

山海の恵み、四季折々

主要な産業は水産業。親潮と黒潮がぶつかり合い、豊富な魚介類が群れる三陸漁場での沿岸漁業や養殖漁業が盛んだ。11月ごろにピークを迎えるサケ漁を中心に、タラやスルメイカ、ウニ、アワビ、毛ガニなど四季折々の恵みが水揚げされ、養殖ではカキやホタテガイ、ホヤ、ワカメなどが清冽な海の香りを届ける。町観光協会が運営し、蒸し焼きカキなどを提供する「三陸山田かき小屋」は震災後すぐに再建され、旬の時期、多くの観光客が訪れる。

内陸部では農業も広く行われ、水稲を中心に多種の野菜類を生産。肥えた土と昼夜の寒暖差が味の良い農作物を育てる。また、シイタケの原木栽培が盛んで、干ししいたけの品質の良さは全国的に評価が高い。マツタケの産地としても知られる。

特産品の養殖カキ（上）とシイタケ（下）

海と山に囲まれた山田町の地形（震災前に撮影）。山田湾には大島（右）と小島（左）が浮かぶ

町の歴史

縄文早期（約7000年前）	沢田Ⅰ遺跡からこの時期の土器が出土
715（霊亀元）年	蝦夷の須賀君古麻比留が昆布の朝貢のため「閉村（閉伊地方）に郡家を建ててほしい」と請願（『続日本紀』）
869（貞観11）年	貞観地震大津波
1192（建久3）年	閉伊氏（佐々木氏）が閉伊郡を治める
1611（慶長16）年	慶長三陸地震大津波（※慶長19年説も）
1643（寛永20）年	山田湾にオランダ船ブレスケンス号が水・食料を求めて入港。乗組員10人が南部藩に捕らえられ江戸に護送
1735（享保20）年	南部藩の領内が33通りに整理。豊間根は宮古代官所、大沢・山田・織笠・船越は「大槌通り」として大槌代官所の管轄に
1760（宝暦10）～65（明和2）年	このころ、曹洞宗僧侶「牧庵鞭牛」が町内の交通難所を相次いで開削
1876（明治9）年	現在の岩手県の範囲が確定
1889（明治22）年	市町村制実施。飯岡村・山田村は合併し山田町に。豊間根村・大沢村・織笠村・船越村が誕生する
1896（明治29）年	明治三陸地震大津波。死者2984人、負傷者960人
1933（昭和8）年	昭和三陸地震大津波。死者・行方不明者18人、負傷者12人
1935（昭和10）年	国鉄山田線の盛岡―陸中山田間が開通
1947（昭和22）年	山田町大火
1948（昭和23）年	アイオン台風で被害
1950（昭和25）年	県立山田病院開設
1955（昭和30）年	山田町・豊間根村・大沢村・織笠村・船越村の1町4村が合併、新山田町が誕生
1960（昭和35）年	チリ地震津波。死者0人、負傷者2人
1965（昭和40）年	大沢・山田・織笠・船越中学校が統合して、山田中学校に
1969（昭和44）年	織笠大橋開通
1974（昭和49）年	町役場新庁舎が完成
1980（昭和55）年	本町出身の鈴木善幸衆院議員が第70代内閣総理大臣に就任
2002（平成14）年	三陸縦貫自動車道（三陸沿岸道路）山田道路開通
2006（平成18）年	県立山田病院が柳沢地区に移転
2011（平成23）年	東日本大震災大津波。死者・行方不明者825人
2011（平成23）年	山田町復興計画を策定
2016（平成28）年	被災した県立山田病院が飯岡地区に移転 希望郷いわて国体高校野球（軟式）競技開催

凡例

▼津波の高さなどの数値が同じ地区でも、章や記事によって同一でないことがある。異なる調査やデータに基づくため。

▼震災による各地区の死者・行方不明者や被災家屋の数、被害額などが、章や記事で、データを取った時点が違うために一致しないことがある。

▼記事中の登場人物の満年齢や肩書は、「当時」などの注記のないものを除き、原則として取材時に合わせてある。

▼第3章の「津波の来襲と避難」で、防潮堤建設や埋め立てなどの経緯などに関する記述は、山田町、岩手県沿岸広域振興局宮古水産振興センター、同宮古農林振興センター、同宮古土木センターなどから提供された資料、これらの機関や地元の方々から聞き取った情報、および過去の津波災害に関する調査報告類に基づく。また、震源域、波源域、沖合での波高などに関しては気象庁、東京大学地震研究所、国土交通省港湾局、電子基準点の標高は国土地理院の情報による。その他図表の作成に用いた資料はその都度示してある。過去の津波災害や集落移転等に関する記述には、公刊されている多数の調査報告・論文等を参照した。

▼「津波の来襲と避難」の避難行動事例で人物の名前や固有名詞を表すアルファベットは、地区ごとに登場順で振ってある。

▼記事中の時刻は、「津波の来襲と避難」のみ原則として24時制を採用したほか、基本的に12時制で記している。

▼町内各地区の区分・呼称は一般的に大別される豊間根、大沢、山田、織笠、船越、田の浜、大浦を使用するほか、津波災害の特性や、地理的な特徴によって異なる津波の影響を考慮し、章によって各地区の亜地区を独立させて扱った（第1章の「柳沢・北浜地区」、第3章の「浜川目」など）。また、記事によって「織笠の猿神地区」、「船越地区浦の浜」などと表記した亜地区もある。豊間根地区に隣接する荒川地区については、第1章の被害状況に関する記述などで豊間根に含めている。

▼本書では、被災した町民らの証言を生き生きと、話者の実感を込めて伝えるために、記事中に当地方で使われる方言を中心に、被災時などに発した言葉をできるだけそのまま記述した。共通語や他地方の方言の話者になじみが薄いと思われる語彙（ごい）や特徴を、本文中の用例と共に次に示す。本文中でも適宜かっこを設けて共通語で意味を記した。

・方向を表す格助詞として「さ」を用いる。共通語の「へ」「に」。
119ページ2段「何、2階さもベランダさも、車何台も乗ってる」

・「すでに」「もう」を意味する口語を「はあ」という。直前に「もう」を伴うことがある。
126ページ1段「これではもうはあ、昭和8年の津波どころではないと思った」

・理由を表す接続助詞に「つけえ」を用いる。「〜だから」。
122ページ2段「この車ではちょっと危険だっけえに、車替えっぺす」

・語尾の「だでば」「だがえ」「え」は共通語の「〜ですよ」「〜だよ」に当たる。「だでば」は親密な相手に対して発することが多く、「だがえ」「え」は「だでば」より丁寧な印象を与える。
123ページ1段「母さん、立ってられねえぐらいの大地震だあでば」
143ページ2段「あー、（津波が）来たがえ」

・関東方言などの終助詞「さ」「ね」と似た用法で「す」を使う。
120ページ1段「私たちがいた所はもう防潮堤になるんだってす」

・共通語の話者の発声する清音が濁音になることが多い。
151ページ4段「母さんが言うごどを聞かねえ。俺だけ逃げるわげにはいがねえがら」

・提案や勧誘をする際の語尾に「べす」「っぺす」「っぺし」を用いる。「〜しよう」。
147ページ1段「津波が来っから逃げべす」
267ページ3段「とりあえず、やってみっぺしっていう精神さえあれば」

・「〜するものだ」などの意で「が」を用いる。
167ページ1段「ここに来れば1回は津波に遭うが」

・「〜しなければならない」の「なら」が省略されることが多い。
261ページ1段「亡くなった、祭りに関わっていた人たちのためにもやんなきゃない」

・動詞「くれる」を「ける」という。
158ページ3段「助けでけろー、助けでけろー」
160ページ2段『織笠のおばあちゃんは元気でいるから』と言づてしてけでね」

・詠嘆の感情を込める際、語尾に「がね」を用いる。
160ページ2段「ああ、おっかねがったがねえ」

・副詞「どう」「どのように」を「なあど」という。
166ページ1段「車、なあどすっぺ」